

四国地方仏教研修の旅（平成元年度）

成 河 峰 雄

禅研究所参禅会では毎年研修旅行を実施しているが、平成元年度は「四国地方仏教研修の旅」を行なった。四国地方はまだ研修旅行で訪れたことがなく、未知なるがゆえに参禅会員としては魅惑の地であった。本来なら団長をお勤めいたたく参禅会会長である竹内道雄禅研究所所長が四大不調となり急遽、鈴木哲雄副所長が代わって団長となった。団員は鈴木団長以下総勢二六名である。旅行社は日通旅行であった。以下、順を追って参観の概略を述べることにする。

八月二六日（土）

8..53 名古屋発。ひかり1号。

10..50 岡山着。

11..00 岡山発。うずしお7号。

四国地方仏教研修の旅（成河）

うずしお7号は途中、瀬戸大橋を一一時五〇分から一二時〇五分にかけて通過し、瀬戸内海の勇壮な景観が眼下に展開していった。坂出を一・二分停車し一二時一〇分出発した。高松には一二時二六分到着し、同三一分出た。

13..40 徳島着。

徳島駅に着くと、伊予鉄観光バスが待っていてくれた。運転手・杉本、ガイド・石水（しみず）のお二人が私たち研修団を最後の松山空港までお世話をして下さることになる。

バスに乗りし動きだしたところで日通の添乗員・永谷氏が挨拶し、続いて吉田道興禅研究所幹事が旅行全行程の紹介、及びこれから行く丈六寺の説明をした。

徳島は蜂須賀公の所領 その後、石水さんの挨拶、徳島県の説明などがあった。石水さんの話から徳島県について概略の知識が得られた。徳島県は私たち愛知県から見れば遠国であるが、愛知県海部郡蜂須賀村出身の武将蜂須賀正勝（一五二六—一五八六）の嫡子・家正（一五五八—一六三八）が阿波一国一七万三千石（あるいは十

八万六千石とも伝えられている）を給され初代阿波藩主となつている。江戸時代を通じて阿波国は同家の領地であり、明治四年（一八七一）の廃藩置県後、幾多の変遷があつたが明治一三年（一八八〇）から阿波国が徳島県になり今日に至つている。このことを想起すれば徳島県と愛知県との関係は大いにあることになる。蜂須賀家は家正の嫡子至鎮（一五八六一一六二〇）の代になつて淡路七万八千石を加増され本領阿波と併せて都合二五万六千九百四十石余を領するに至つている。これから參觀する丈六寺は蜂須賀氏との関係が深い。

2・20 丈六寺着

〔丈六寺〕

三門 丈六寺にはバスから下りて小川に沿つて静かなたたずまいの中を数分歩いて到着した。真っ先に眼に入つたのは楼門形式の三門である。当寺宝物館のパンフレット「よみがえる室町の文化 阿波丈六寺宝物館」（以下「宝物館パンフレット」と呼ぶことにする）に、

室町末期の建立で、本県最古の三間三戸・本瓦ふきの重層門。三間三戸とは三つの柱間とも戸口となつて

通行できるといふ意味。様式は粽柱・礎盤・火頭窓に見られる禅様式（唐様）を基調に、垂木や二階の擬宝珠勾欄などには和様がとり入れられている。鎌倉・室町・桃山期への推移がわかる貴重な建物である。

〔昭和二十八年三月三十一日 重要文化財指定〕

とあり、そのおおよそをつかむことができた。

パンフレット等 丈六寺では住職・豊田知雄老師等のご接待にあずかつた。資料として次の六種をいただいた。

①「よみがえる室町の文化 阿波丈六寺宝物館」

（編集発行 社団法人 徳島県観光協会、監修

丈六寺顕彰会、昭和五八年七月三〇日初版第一冊

発行）

末尾には「所蔵品目録」があり、当寺の宝物が充分整理がなされていることが知られる。

②「よみがえる室町の文化 阿波丈六寺宝物館」

①と同名のパンフレットであるが、二つ折り、一枚のものである。編集も同じく徳島県観光協会である。この特徴は「丈六寺境内案内図」があり、伽藍配置はもとより歴代の寺とかかわりを持った人々の墓の位置が一目瞭

然となる。

③「丈六寺案内」(丈六寺顕彰会発行)

一枚を三つ折にしたパンフレットである。

④「寺宝のしおり 附人物略伝」(丈六寺顕彰会発行、昭和三五年一月二二日)

宝物の品目に筆者、伝承を付し、末尾に筆者などを五十音順に配し簡単な説明を施したものである。恐らくこれは①の「よみがえる室町の文化 阿波丈六寺宝物館」末尾の目録を作成したときの資料になったのではなからうか。

⑤『阿波丈六寺』(丈六寺顕彰会 昭和五三年一月三日初版発行、いただいたのは昭和五四年一月三日発行の第二版)

この書は伽藍・美術品の写真をたくさん載せ、末尾に所蔵品目録を付けるのは①と同じであるが、その前に「丈六寺略年譜」を収載しその記載事項の典拠も付し好学の士の便宜を計っている。

⑥『慈雲院道空細川成之伝』(後藤捷一著 大阪史談会発行、頒布所 丈六寺事務所、昭和三四年三

四国地方仏教研修の旅(成河)

月一八日)

これは丈六寺開基・細川成之の伝記である。資料を多方面に渡って渉猟した力作である。いちいち、典拠を示し優れた学術書である。

以上六種の資料から随分と丈六寺に関する豊富な知識が得られる。

丈六寺沿革 右六種の資料から寺の沿革を見てみよう。明治以前の寺歴は大きく分けると四期に区分することができるのではなからうか。

第一期 草創期

「丈六寺案内」中にある「寺の縁起」によると、関東の酒造家夫婦が奈良に向かう途中、海賊に襲われ夫は切り殺され妻女は海賊船に移されたが隙を伺いやつとの思いで小舟に乗り移り難を逃れることができた。彼女は夫を始め殺害された人々の冥福を祈るため諸国の仏寺を巡拝することを決意した。ある秋の日の夕刻勝浦側の堤に立った。村人は彼女の境遇を聞き、同情し小舎を建て住まわせた。その年は天武天皇の白鳳(六七三―六八六)年中という。その後、彼女は仏弟子として徳行を積み、

四国地方仏教研修の旅（成河）

諸国巡錫中の行基（六六八―七四九）がこれを聞いて来訪し「聖観音坐像」を造り与えた。この観音像の大きさが一丈六尺であったことから丈六寺と言われるようになった。

境内から奈良時代の古瓦が出土するというから右の縁起の真偽は暫く置くとしても奈良時代には堂舎がこの地に存在したことは確かであろう。

一方、同じ「丈六寺案内」中の「寺の概略」では本尊の聖観音坐像は平安時代の傑作とし、製作者とされる行基の年代より後代であることを明かす。

この地は藤原教通（道長の次子。関白）の荘園であった（「丈六寺案内」）。

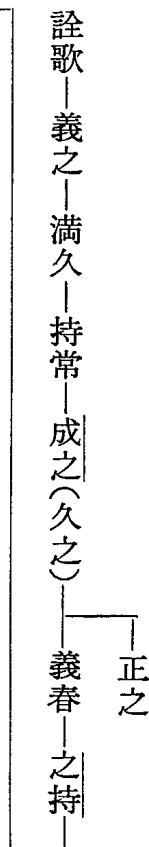
天喜四年（一〇五六）になって観音堂を創建し、文和三年（一三五五）に再興される。これは寺の文献、棟札の銘から知られる（「丈六寺案内」）。

第二期 曹洞宗寺院―細川氏の外護

第二期は曹洞宗寺院として再出発した時期である。足利尊氏の武將細川阿波守和氏（一二九六―一三四二）・讃岐守頼春（一二九九―一三五二）兄弟の時代から細川

氏一族が勝瑞城（板野郡）にあって平坦部をおさえた。頼春に頼之、頼有、頼元、詮春、満之といった子がいた。このうち、詮春が下の屋形・讃岐守の先祖となる。

『読史備用』及び「宝物館パンフレット」によれば、詮春の後は



―真之（横線を引いた人は丈六寺に墓がある）

といった系図が描かれる。但し『寛政重修諸家譜』では持常が抜け、久之の子を之勝とする。さらに成之を久之とするが、法号が「大川道空慈雲院」であるとすれば、久之の成之と判る。

さて、右の系図に出てきた細川成之であるが、かれは阿波・讃岐の守護を勤めている。この人が現在地に「慈雲院丈六寺」を創建した。慈雲院は成之の法名「慈雲院道空大川」から取り、丈六寺は本尊の聖観音坐像の身丈、一丈六尺に由来するという。創建の年代は文正元年（一

四六六)とされている。成之の肖像画があり昭和四二年重要文化財に指定されている。なお、成之の無縫塔が当山墓地にあり、その向かって左に持隆、右に真之それぞれ五輪塔がある。「宝物館パンフレット」は持隆、真之の父子を寺運興隆につとめた人とする。

成之は寺を創建するについて金岡用兼(一四三八—一五一五)を開山に請じた。金岡については曹洞宗の史伝『続日域洞上諸祖伝』、『日本洞上諸祖伝』に記載されている。今はその詳細を省く。

第三期 三好・長宗我部時代

阿波における細川氏の勢力もいつまでも続かず、戦国時代に入り、三好長慶・義賢兄弟が京・阿波で呼応して細川氏に代わり、ついで松永久秀がまた主筋の三好三人衆を倒して実権を収めた。

天正三年(一五七五)長宗我部元親(一五三九—一五九九)は土佐一國を併せ、さらに阿波の大西覚養、三好長治らを撃ち、天正六年(一五七八)の交、阿波の三好・美馬の諸郡を併せて次第に阿波を兼併した。天正一〇年(一五八二)六月、織田信長が本能寺の変で倒れたのに

四国地方仏教研修の旅(成河)

乗じ、八月勝瑞城の十河存保を追い、岩倉城を陥落して遂に阿波を平定した。

今日、丈六寺には、名高い「血天井」がある。禅堂に対面する徳雲院という建物の前にある回廊の天井である。その由来は次のように伝えられている。長宗我部元親が阿波平定を目前にしていた天正一〇年、これに敵対していた富岡城(現在の阿南市富岡町)に拠っていた新開遠江守忠之を陥れようと一計を案じ、丈六寺において和議を開きたいと新開側に申し入れた。和議成立の祝いと懇親を兼ねた酒宴が開かれ土佐側の好意による美酒馳走を新開側は満喫し不覚にも酔いしれた。夕闇が近づく頃、忠之主従は辞して縁側に出た。曲り角のふすまの片側に身を隠していた武士が、忠之の肩口に切りつけた。多勢に無勢、忠之主従は皆な斬殺された。このとき「飛び散る血潮は流れて縁板にしみ入り真紅となり、手の方、足の方、恨みの血痕はふけども消えず、忠之の血汐はいまなお残っているのである。」と「宝物館パンフレット」は記す。後世この縁板を回廊の天井板に用い、血天井と称したのである。忠之の墓も当山墓地にありこれにより

四国地方仏教研修の旅（成河）

天正一〇年九月一六日が忠之の死亡日と判り同時にこの事件の起こった日にちも知られる。

第四期 江戸時代―蜂須賀家の外護

天正一三年、豊臣秀吉は諸將を用いてすでに四国一円を平定し阿波・三好に拠っていた長宗我部元親を攻略し、元親は土佐一國を得て他の三國を返上した。このとき蜂須賀正勝は阿波・木津城を陥落しその功により子・家正に阿波一國を宛てがわれた。正勝自身は翌、一四年に大坂で歿した。

蜂須賀家正は慶長五年（一六〇〇）には致仕し蓬庵と号した。同年の関ヶ原の戦いでは石田三成との盟を絶つて家康に属したので、その子至鎮も本領を安堵せられた。その後、廃藩置県に至るまで蜂須賀家が徳島の藩主の地位に居た。

本堂は三門と対向した位置に東面して建っている。これは寛永六年（一六二九）蜂須賀蓬庵（致仕後の家正の号）が娘の実相院（お辰）供養のため方丈として再建したものである。現在は本堂となっている。この建物も昭和二八年に重要文化財に指定されている。

丈六寺墓地には八基の阿波藩重職者の墓が林立している。これは当寺がこれらの人々の帰依を受けたことを物語るものである。

丈六寺の顔 丈六寺は実に多くの顔を持っている。それを整理してみると

（一） 阿波の法隆寺・正倉院

三門、本堂、観音堂などの重要な伽藍は皆重要文化財に指定されており、代々の寺宝が多く伝わり、貴重な書画・経巻・古文書など数百点が永年に渡り保存されている。そのため丈六寺は阿波の法隆寺・正倉院と呼ばれるに至った。こうした宝物を一般に展示するために昭和五八年七月三〇日に丈六寺宝物館が丈六寺三門横に開かれたのである。

（二） 丈六観音像

前述したように、丈六寺はこの観音像の身丈から名付けられた。本尊仏たるこの観音像こそ丈六寺の起源を表わすものである。

（三） 曹洞宗寺院

金岡和尚を開山とする曹洞宗の寺である。

(四) 阿波の大名の外護を受ける

丈六寺は細川、三好、蜂須賀といった阿波の大名の外護を受け開創・発展・展開してきた。これはこれらの有力者の外護なくして丈六寺の歴史は考えられないことを意味する。

(五) 尼僧住庵から来る真摯な信仰

丈六寺の草創は尼僧が住庵したことに由来するという伝説から仏教信仰の真摯な道場であるというイメージをもたれる。

3 09 丈六寺発

3 30 国分寺着

国分寺 国分寺の住所は徳島市国府町矢野七一八一である。住持・佐藤玄由老師の懇切なご説明、心暖まるご接待を受けた。

本尊は薬師如来坐像で、行基菩薩の作と言いつい伝えられている。聖武天皇、光明皇后の位牌を奉安し、当時の礎石は今も尚あるという。

現在は曹洞宗に属し、万安英種を再興開山としている。聖武天皇の天平一三年（七四一）に諸国に国分寺・尼

四国地方仏教研修の旅（成河）



国分寺山門

四国地方仏教研修の旅（成河）

寺を建立するようにとの詔が出されている。国毎に七重塔一基を造り、金光明最勝王経・法華経を写し、天皇自ら金字の金光明経を写して塔毎に納め、僧寺を金光明四天王護国之寺、尼寺を法華滅罪之寺と命名する（三代格）。従って、この国分寺もまたこの詔の後、何年かの後建立されたと見られる。七重塔のお話もご老師から伺った。

この由緒正しい古刹が曹洞宗寺院となっていることに感慨を覚え、寺を辞した。

4..30 国分寺発

眉山パークウェイをバスが走り山頂から徳島市を眼下に見、旅の疲れを癒した。

6..11 ホテル白水園着

7..15 夕食（二階亀の間）

七月二十七日

この日、あいにく台風が四国に上陸したため予定していた栗林公園見学を急遽、中止し善通寺へ直行することにした。

9..00 ホテル出発。

横殴りの雨の中、国道一―号線を行く。吉野川大橋を渡る。

9..44 引田町でトイレ休憩

10..00 出発

11..35 琴平観光センター着

ここで昼食に名物の讃路うどんをいただく。

12..35 出発

12..40 善通寺着

善通寺 善通寺は弘法大師空海が自らの誕生の地に建立した真言宗発祥の根本道場とされ、京都の東寺、高野山とともに弘法大師の三大霊場と称され信仰を集め、四国霊場第七五番札所となっている。雨が大降りのためゆっくり参拝できず残念であった。

1..15 出発

3..05 瑞応寺到着

瑞応寺 愛媛県新居浜市山根町八―一。瑞応寺は四国唯一の曹洞宗専門道場である。瑞応寺は山号を仏国山という。その地はまさに四国の仏国を思わせる静寂な境で

あった。伽藍と自然が一如となりあたかも天地悠久の釈迦如来の御身そのものを思わせる。雲衲のもてなす茶は瑞応寺の修行が確かなものであることを示した。樹齡千年の大銀杏は人間の営みをすべて知るが如く、仏道の何たるかを語るが如く境内に立つ。

堂長の檜崎一光老師は御不在であったが後堂老師の暖かい御法話は団員の胸に鮮烈な印象を遺した。

資料類として次の二点をいただいた。

①「仏国山瑞応寺 参拝の葉」

一枚三つ折りの葉である。主な場所のカラー写真を入れ、「瑞応寺史」を収載している。

②「瑞応寺絵はがき」

これはその名のとおり、瑞応寺の各所を写真に納め、それぞれをはがきにしたものである。

いただいた葉の一部を抜き出しておこう。

仏国山瑞応寺は、文安五年（一四四八）に庄司山城主十一代松木景村公が、鎌倉から月担禪師を請して、父母の菩提のために堂宇を建立したときから始まる。その後天正十三年（一五八五）豊臣秀吉公四国征伐の

四国地方仏教研修の旅（成河）

戦火で廢墟と化した。

万治三年（一六六〇）徳川の治政下となり広島県東城徳雲九世の法孫文外禪師が、当地の庄屋河端、神野家等に迎えられて入山再興した。徳雲寺九世白翁禪師を開山に仰ぎ自らは三世となる。たまたま文政十一年春火災で全焼したが、五十年余にして旧觀に復した。

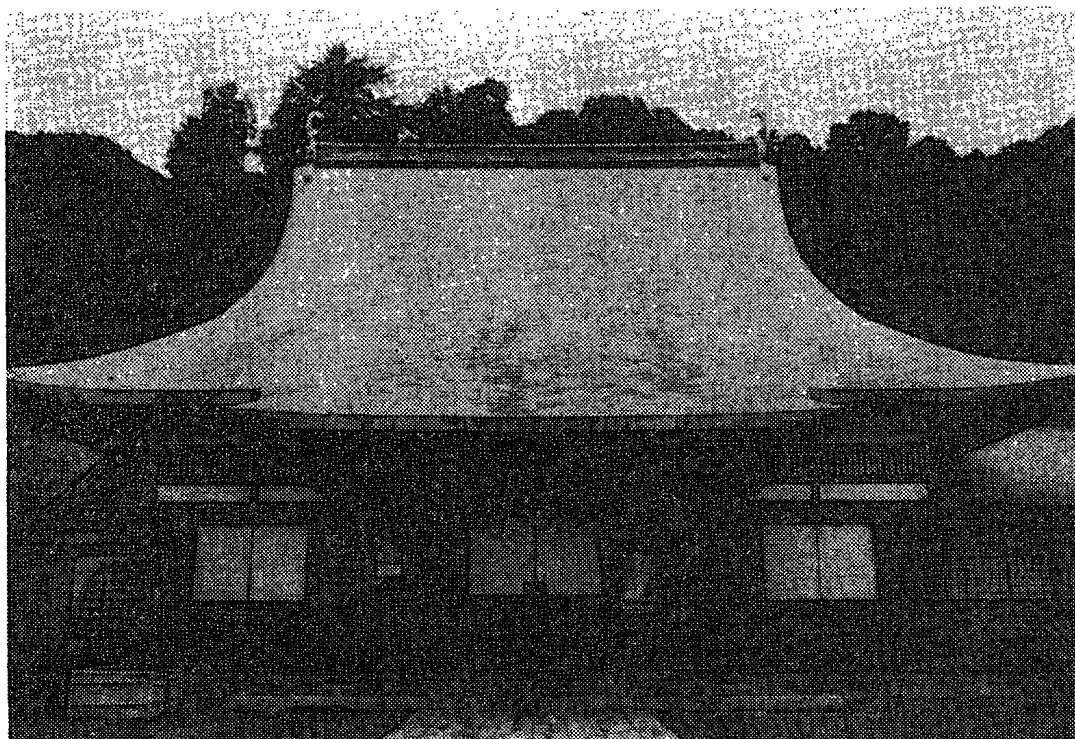
明治三十一年より専門僧堂を開設。以来広く学僧が出入、一般参禅者も跡を絶たない。又境内西側には、昭和二十八年以来ひかり幼稚園を創設し、子女の育成にも尽くしている。

本尊釈迦如来像は行基作と伝えられる。鎮守金毘羅大権現、弁才尊天は共に由来古く、招福・除災の靈驗あらたかである。一切経を収納する輪藏は県文化財に指定されている。樹齡千年を数える大銀杏は金毘羅尊天勸請の伝説を伝える神木である。（県指定天然記念物）

4..55 瑞応寺発

5..05 西条市で休憩

5..19 出発



瑞応寺法堂

6 :: 26 道後温泉・寿園着

道後温泉 夕食後、団員の中には道後温泉本館に入湯に出向いた人もいた。三層楼のこの建物は明治二七年に建てられ、伝統の風格をたもっている。多くの温泉客が旅の疲れを癒し心とませたことであろう。一階は「神之湯」の湯釜があり、二階には神之湯に通じる休憩室、三階には落ち着いた和室の個室がいくつもあり休憩できるようになっている。かの明治から大正に掛けての文豪・夏目漱石が遊んだ部屋「坊ちゃんの間」は三階にある。筆者はその部屋を見せてもらった。しばし小説『坊ちゃん』を思い出した。

七月二八日

8 :: 35 ホテル発

9 :: 10 砥部焼・梅野精陶所着

梅野精陶所は愛媛県伊予郡砥部町大南にある。作品は梅山の号を用いている。上り釜を見せてもらい、店舗で何人かの団員は作品を購入した。

10 :: 00 出発。

10..45 法竜寺到着

法竜寺 法竜寺は愛媛県松山市柳井町にある。事典の説明を転記しておこう。

仏国山。開基は久松定行で、開山は建庵順佐、もと静岡県掛川に建立し永奥院と号した。久松家移封にしたがい桑名、寛永一二年松山各城主となり長寿院と改称。二世月舟賢順は定行の子息である。三世闍室賢策の代に現在寺号に改め、永平寺直末となり融峯本祝を請し開山。昭和二〇年戦災で消失し現在復興中。

当山の住職、栗田伸美老師は曹洞宗宗会議員をお勤めの方である。当日は公務で打出されていたが、寺族の方々の暖かいおもてなしを受け、寺を後にした。

11..15 法竜寺発

市内の食堂で昼食を済ませた。

12..07 西禅寺別院着。

江戸時代の僧録のあった松山市御幸町、天臨山竜穩寺ゆかりの寺であるということとで拝登した。ご住職から

『竜穩寺略縁起 附十六日桜』（西園寺・源透著。竜穩寺発行。大正一二年一月初浣）という書を拝借し大学に帰

四国地方仏教研修の旅（成河）

った後、複写してからお返しした。竜穩寺の歴史を外護者屋形家（道後湯月の城主）、松山藩主・加藤家とのかかわりを理解するに役立つ。

12..43 西禅寺別院発

12..20 子規堂見学

子規堂明治の俳人・松岡子規に関係する種々のものが展示してある。

12..50 伊予かすりセンター着

2..08 伊予かすりセンター発

2..10 四国海産物センター着

伊予かすりセンター・四国海産物センターの両所で団員は家族・知人に土産物を買った。

2..36 四国海産物センター発

4..00 松山空港発

全日空316便で一路名古屋に向かった。

4..55 名古屋着

今回の旅行は曹洞宗寺院の中で、歴史の寺、丈六寺・国分寺、禅修行の寺、瑞応寺参観を中心とするものであった。

四国地方仏教研修の旅（成河）

道後温泉は旅に文字どおり暖かい色を添えた。旅行中、一人の事故もなくそれぞれ研修の実を挙げ得たと思う。

この旅行記録は筆者の準備並びに記録不足のため充分、その任を果たし得なかったことをお詫びする。丈六寺に紙幅が多く傾いてしまったのは資料が豊富にあったからである。最後に団員一同に配布した「四国地方仏教研修の旅・しおり」は禅研究所吉田道興幹事の苦心の作であり、団員は旅行中、これを予備的知識を得るのに役立たせて頂き、多大の便宜を得たものである。これをとくに記して筆を擱く。